

○第49回（平成31年1月30日）評価委員会評価

平成30年度の連携排砂は、6月27日～29日（1回目）、7月5日～7日（2回目）の計2回にわたり実施した。その後、8月31日に細砂通過放流を実施した。

出し平ダムからの排砂量は、目標排砂量165万 m^3 に対し、2回の合計で117万 m^3 となり、想定変動範囲の112万 m^3 ～165万 m^3 の内に収まった。宇奈月ダムでは、32万 m^3 が排出された。

連携排砂を開始した平成13年度以降最大の排砂量であり、1回目の連携排砂では河川及び海域の一部地点で水質、底質に高い値が示されたものがあつたが、既往の観測値と比較しても大きな影響を及ぼしたものは考えられない。

今回の連携排砂及びそれに伴う環境調査の結果から以下の知見が得られた。

◇水質調査について

河川では、

- 1回目の連携排砂では、宇奈月ダム直下のCODが既往の観測値に比べ高い値を示すなど、他の地点も含めて既往の観測値に比べて高い値を示したが、2回目の連携排砂では、既往最小値を下回るなど、全般的に低い値を示した。

海域では、

- 河川と同様に1回目の連携排砂では、C点のSSが既往の観測値に比べ高い値を示し、2回目の連携排砂では、全般的に低い値であった。

◇底質調査について

- 出し平ダム及び宇奈月ダムの湛水池では、5月、9月の定期調査時においては、概ね過去の測定値の範囲内であった。また、細砂通過放流前後の調査結果より、一部で土砂変質抑制等の効果が見受けられた。

◇宇奈月ダム貯水池内地質調査（ボーリング）結果について

- 20.8k調査地点におけるボーリング試料分析結果を前回（平成24年）と比較すると、有機物指標に顕著な変化は見られない。

◇水生生物調査

- 河川付着藻類については、山彦橋地点の優占種変化要因の一つとして、上流の宇奈月ダムから供給される土砂と河床の粒径組成に関連性があるものと考えられる。

◇大粒径土砂の移動状況調査について

- 宇奈月ダム貯水池上流に存在する10～50cm程度の大粒径土砂の一部が、連携排砂によりダム下流へ移動することが確認された。

◇今後の留意点

- ① 連携排砂による土砂動態について
 - 今後は、出し平ダムの排砂量のみならず、宇奈月ダムから河口までの土砂動態が自然に近い形で実現できるような連携操作について検討すること。
- ② 河床地形について
 - 航空写真等を活用し、土砂流出に伴う、瀬、淵構造の変化の把握に努めること。
- ③ 底質調査について
 - 海域の深海底質や土砂堆積状況の調査の実施を検討すること。
- ④ 水生生物調査について
 - 河川、海域のベントス調査について、排砂の影響分析の実施を検討すること。

以上